

プロローグ

(舞台、照明。作家の部屋。)

作家 「まあ、入りなよ」

劇団員1 「おじゃましまーす」

劇団員2 「おじゃましまーす」

劇団員3 「・・・」

作家 「もうちよっと待ってて、キリのいいところまで書いたら渡すよ」

劇団員1 「はーい」

劇団員2 「はーいじゃないでしょ」

劇団員1 「あそっか」

劇団員3 「あのう、ちよっとその前にお話が」

作家 「ん？」

劇団員1 「おっ、単刀直入」

劇団員2 「早い展開ね」

作家 「えっ？ ちよっと待ってて、えっと、何？ ああ！ ごめんね、稽古始まつてるのにまだ、半分しか台本出来てなくって、」

劇団員3 「あ、いえ、それは別に。って言うかいつものことだし」

作家 「えー、いつものことかなあ？」

劇団員1 「いつものことです。」

作家 「この間はけっこう、」

劇団員2 「この間っていつの話ですか？」

作家 「この間って言うのは、ほら、あの、そっかあー、いつも申し訳ない」

劇団員3 「はい。いえ、そうじゃなくって、あの、ですね、今日来たのは、」

劇団員2 「起立！ きおつけ！」

二人 「はい！」

作家 「・・・ん？」

劇団員3 「……今回の台本、すみません、ボツにさせて下さい」

劇団員1と2 「すみません！」

作家 「・・・、ボツ？」

劇団員1 「ボツっす」

作家 「ん？ えっ、どうして？ まだ半分、第一部しか出来てないんだよ」

劇団員3 「その半分で」

作家 「駄目ってこと？」

劇団員1と2 「すみません！」

作家 「えっ、ああ、そう、まあ、決まったことなら仕方、えっー、仕方がない？

いやいやいや、えーと一応聞いていいかな、あの、どうして?」

劇団員3 「すみません、本当に」

作家 「どうして?」

劇団員3 「すみません」

作家 「いやそうじゃなくって、理由が」

3人同時 「すみません」

作家 「アンサンブル!」

劇団員3 「理由、は・・・、んー、あの話では厳しいって言うか」

作家 「厳しいとは?」

劇団員2 「すみません、あれでは、駄目なんです。駄目です。こっちの都合もあります
が、でもすみませんが、あれでは駄目なんです。色々みんなで話し合って、今
回はボツにさせてもらおうってことに、ね?」

劇団員1 「うん」

作家 「んー、まあ何ていうか、仕方がないといえば仕方がないけど、いやいや、納
得できるかといえば、んー、・・・どこが? もっと具体的に話してもらって、
何とかなりそうなら書き直してみてもいいけど。あ、いや、時間的にさらに
厳しくなっちゃうけど、でも、こっちとしては聞くだけ聞きたいって言うか」

劇団員3 「もっと根本的な問題で、本当すみません。これは結論で。」

作家 「って言われてもさあ」

劇団員1 「あの、僕たち、リアルなものやりたいんじゃないんですよね。現実、ってち
よっと厳しいじゃないですか今。はつきり言ってますごく厳しい。お客さんも
今はリアルなもの求めてないと思うんですよね。ファンタジー、とまで言わ
なくってても、でもまあ現実を反映なんかさせてなくって、完全に違う世界の
話とか、まったく現実には起こりえない話とか、あつ、恋愛のことしか考え
てない男女の話とか、イエーイって、まあ単純に面白がれるやつがいいんで
すよ。少なくとももっと明るい話がいいって言うか、もうリアルなんて勘弁
してほしいって感じで。」

劇団員2 「私、現実社会でつらい目にあって、わざわざ劇場にまで来て、また辛い話
なんか観たくないと思うんです。先生、あの、一体どうしちゃったんですか?
前はもっと荒唐無稽な、現実ではありえない、そんな話を、」

作家 「前から・・・、僕を書くものは暗かったよ。と思うけど。僕は変わってない
と思う。もし僕が変わったように見えるんならそれは、変わったのは世界の
方だと思う。別に意識してないんで現実を反映とかよく分かんないけど、そ
りゃ現実はそのにあるし、目の前だし、昔っから暗いしね、すこしも辛くな
いような話なんて今までも、」

劇団員3 「いえ。でもリアルじゃなかった。これはほめ言葉として言ってるんですが」

劇団員2 「もっと漫画みたいだったよね」

劇団員1 「そうそう」

劇団員3 「面白かったし、けっこう笑えた」

劇団員2 「ねえ、そろそろもう。長居してもナンだし」

劇団員1 「そうだな、長居してもナンだな」

劇団員3 「あの、すみません、今回は本当。」

劇団員1 「さようなら」

(劇団員1と2と3、去る。)

作家 「・・・漫画みたい、か、前はリアルじゃなかった、ほめ言葉として、んー複
雑・・・」

(謎の女、登場。謎の女って...(笑))

謎の女 「なんか、おかしなことになったわね」

作家 「ん？ 聞いてたのか？」

謎の女 「なんかね」

作家 「耳がいいな」

謎の女 「デビルイヤー。ただいま。」

作家 「あっ、おかえり。はあ、まいったー」

謎の女 「落ち込んでる？」

作家 「んー、急に暇になったー」

謎の女 (笑) 「そうね」

作家 「まだ途中だったのになあ」

謎の女 「麦茶飲む？」

作家 「うん。」

謎の女 (麦茶をコップに) 「ねえ、最後まで書いてみたら。で、もう一度稽古場に持っ
て行ってみるとか。」

作家 「『これでどうだ！ 文句あるか！』って？」

謎の女 「そう」

作家 「で、又やっぱりボツになると。」

謎の女 「んまあ、分らないけど。」

作家 「んー、なんかモチベーションがなあ。」

謎の女 「私が今分らないって言ったのは可能性が『ある』って意味よ。」

作家 「受け止め方受け止め方」

謎の女 「ねえ、どんな台本だったの？ これ？」

作家 「あ、それは途中で。えっと、こっちが頭っから、」

謎の女 「奇妙な旅の、旅のしおり」

作家 「いいタイトルだろ？」

謎の女 「そう？ よく分かんないけど、で、どんな話？」

作家 「読めよ」

謎の女 「面倒くさい」

作家 「どうせボツ原稿だしってか」

謎の女 「そうじゃないけど、(棒読みな言い方で) あなたの口から聞きたいの。あなたの声で。」

作家 「棒読み」

謎の女 「んー、アンドロイドっぽく言ってみただけど。」

作家 「なぜ! おっ、この麦茶美味しいなあ」

謎の女 「ねえねえ」

作家 「んー、・・・画家が、絵を描いてるんだ。最初の場面、モデルはものすごく綺麗な女性。神秘的で、謎を秘めている。実際に画家は彼女がどんな人なのかまだ知らない。素性とか、個人的なことはなーんにも。たまたま偶然出会って偶然、その人を描くことになった」

謎の女 「ヌード?」

作家 「おっ、ヌード! まあ台本上はね、でもそれは劇団の都合とかあるからさ。

演出次第だけど、そこはそんなに重要じゃない。」

謎の女 「ふーん。それで?」

作家 「やっぱ読んでよ。」

謎の女 「そうね、ちょっと面白そうって思っちゃったから、読んでみようかな。これ?」

作家 「そう。」

謎の女 「ねえねえ、この人は私をモデルにしているの?」

作家 「君を?」

謎の女 「だって、綺麗な女性。」(ポーズ)

作家 「自分で言うか!」

謎の女 「はははは」

作家 「まあ好みではある。」

謎の女 「おっ。」

作家 「お世辞だけど。」

謎の女 「えっ。まあ、そこは置いといて、ほら、神秘的で、謎を秘めている、実際にあなたは私とどんな人なのかまだ知らない。素性とか、個人的なことはなーんにも。」

(間。)

作家 「・・・。うん、そうだったね。もう知り合ってから何年にもなるのに。」

謎の女 「私がモデル?」

作家 「さあどうだろ。影響は受けたんだろうねきっと。でも、だとすると、僕は勝手に君の物語を、本当は何も知らないのに君の過去を勝手に書いたことになる。想像で、これまで酷い経験をしてきて、カラダにも心にも傷を負った、そんな暗い過去をね。それでもいい?」

謎の女「んー、暗い過去か・・・、なんか当たっちゃったらヤバイわね・・・」
作家「あるんだ、暗い過去が。」
謎の女「さあ、どうでしょう。」

(作家、謎の女を後ろから抱きしめる。間。)

謎の女「・・・こらこら」

作家「・・・うん。」

謎の女「・・・今は、ごめん」

作家「分かってる。でももう少し・・・」

謎の女「・・・」

(作家、離れる。)

謎の女「男の人って大変ね、今はごめんって言われたり、なんで来ないので言われ
たり」

作家「なんで来ないのと言われたことないけど」

謎の女「私じゃなくって、一般論よ」

作家「んー、一般論でも言うかな、そんな嬉しいこと」

謎の女「嬉しいの？」

作家「そっか、どうだろ」

謎の女「なんで来ないの？」

作家「・・・その手には乗らない・・・」

謎の女「はははは」

(舞台上の2人、そのまま移動、中央に謎の女、脇に作家、寸劇的に、イーゼ
ルなどの小道具を置き、作家は絵描きになり、謎の女はモデルになる。女は
最初は台本片手に。)

謎の女(一度服を脱ごうとはだけるが、戻し)「劇団の事情。」
作家「はいはい。」

(世界が変わる音。ブンツ。作家↓画家。謎の女↓モデル。)

画家・・・

モデル・・・

画家・・・あの、退屈じゃありませんか？

モデル・・・退屈？

画家「ずっと、ジツとしてて。」

モデル「えっ、だって、それがモデルでしょ？」

画家 まあそうですが、
モデル あなたがそうさせてるんですよね？
画家 まあ、そうですね。
モデル 退屈だっと思ったら何か変わりますか？
画家 んー・・・
モデル なんかないよっていうのって、話しながらでも大丈夫なんですか？
画家 大丈夫とは？
モデル 今描いてるの。
画家 ああ、ええ。
モデル じゃ、何か話しますか？
画家 ええ。ぜひ。
モデル リクエストとかありますか？
画家 リクエスト！ おっ、カラオケみたいですわね。
モデル カラオケって何ですか？
画家 いやカラオケくらい知ってるでしょ。
モデル すみません。
画家 えー、歌うとこです歌うとこ。
モデル あっ、教会みたいな。
画家 教会とはちよっと、いやぜんぜん違いますわ、
モデル そう、あつても、私は歌いませんよ。
画家 ああ、はい。雑談でいいと思いますよ雑談で。
モデル 昔々あるところに、どんぶらこ、どんぶらこって桃が、
画家 それが君の雑談。
モデル 冗談ですよ。
画家 本気かと思った、カラオケ知らないし、いや、じゃ一つ聞いてもいいですか？
モデル はい、なんでも。第一問。
画家 名前、とか。
モデル 名前、か。じゃ、その話をしましょうか。
画家 その、話？
モデル はい、私の名前の話です。私が一体誰なのか。
画家 誰、なのか。
モデル ええ。
画家 おっ、名前一つで何か物語がありますか？
モデル はい。実は。
画家 奇妙な感じですね、じゃあぜひ、聞かせて下さい。
モデル ええ。

(舞台、そのまま電車の中になる。作家が書いた物語の中の、その中に登場する女の語る、過去の物語・・・音楽。それは、登場した幸子のヘッドホンの音楽だ。モデルの女はその中を幽霊のように徘徊する。物語が始まってく・・・)